

JOHAニューズレター

第44号

日本オーラル・ヒストリー学会第21回大会（JOHA21）のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第21回大会（JOHA21）が2023年11月11日（土）・12日（日）に琉球大学を開催校としてハイブリッド開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第21回大会

会長・開催校挨拶	・・・2
1. 大会プログラム	・・・4
2. 自由報告要旨	・・・8
3. 会長企画ワークショップ「地域とメディア：語りを伝え、残すこと」	・・・19
4. シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか——実践的な身振りに目をとめる」	・・・19

II. 理事会報告	・・・20
第10期臨時理事会（2023年3月20日）	
III. シンポジウム・ワークショップ報告	・・・22
IV. お知らせ	・・・24

1. 会員異動	
2. 2023年度会費納入のお願い	

＊ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第21回大会

Japan Oral History Association 21th Annual Conference

《会長挨拶》

新型コロナ・ウィルス感染症も、2類から5類に移行し、全国各地でもコロナ流行前の活動状態に戻しつつあるようです。私の地元青森でも、4年ぶりに「青森ねぶた祭」がコロナ前の姿で行われました。大変たくさんの方が来訪し、おおいに盛り上がりました。

さて本学会大会は今年沖縄で開催されます。沖縄大会では対面を中心とし、学会のこれまでの姿に戻るよう、大会校の皆様がご尽力を尽くされています。昨年の記念大会では、国際的な視点、多様な立場からライフヒストリーにかかわる人、そしてそれぞれの地域に根差した語り、といったことの重要性が再確認されました。今回の沖縄大会は、まさしくその象徴ともいえる内容になっています。個人報告はもちろん、フィールドワーク企画、ワークショップ、シンポジウムなど多様なプログラムが用意されています。是非足を運んでいただければ幸いです。

さてJOHA第10期の理事会も、今大会をもって解散となります。JOHAも少しずつ変容し、新しい課題も提起されました。また同時に次の世代にむけ、発展的な取り組みも開始されています。次の理事の皆様へ引継ぎつつ、今後も協力してやっていきたいと思っております。会員の皆様には様々ご協力いただきありがとうございました。この場をもって挨拶とさせていただきます。

JOHA 会長 佐々木てる

《開催校挨拶》

設立から20年を経て新たな一步を踏み出そうとするJOHAの第21回大会が琉球大学で開催されることになり、光榮に存じます。

今大会の開催は、沖縄社会にとっても意義のあるものです。1日目のフィールドワークでは、語りの現場ともいべき魅力的なスポットをめぐる予定です。2日目の会長企画ワークショップ、3日目の大会シンポジウムもまた、沖縄の地元メディアや歴史体験に関連する内容です。また今大会では、琉球沖縄歴史学会にご協力を、沖縄県地域史協議会にご後援を頂いています。関係者の皆さまに深謝し、交流が広がることを願っております。

那覇から琉球大学までの交通の便は、あまり良いとは言えません。また会場内にコピー機、wi-fiがなく、周辺に飲食店もないことなど、ご来場の皆さまにはたいへんご不自由をおかけすることもあるかと存じます。この場を借りてお詫びいたします。

多くの学会員の皆さまにとって遠隔の地であるにもかかわらず、きわめて多数の自由報告のお申し込みがありました。皆さまのご期待に応えられるように最善を尽くしてお迎えいたします。どうぞふるってご参加ください。

開催校理事 野入直美

開催日：2023年11月11日（土）・12日（日）

会場：琉球大学人文社会学部文系講義棟（〒903-0213 沖縄県西原町字千原1）

開催方法：ハイブリッド（対面＋オンライン）

参加費：会員 1000 円、学生他（会員・非会員）1000 円、非会員 2000 円

参加費の支払い方法：対面・オンライン参加にかかわらず、peatix（イベント管理サービス）にて事前にチケットをご購入ください。

<https://joha2023.peatix.com>

支払いには以下の決済方法をお使いいただけます。

- ・クレジットカード（VISA、MasterCard、JCB、AMEX、Discover、Diners Club、PayPal）
- ・コンビニ（Lawson、FamilyMart、Ministop、Daily Yamazaki、Seicomart）
（手数料は購入者負担）
- ・ATM（Pay-easy、ゆうちょ銀行、ジャパンネット銀行、楽天銀行、じぶん銀行）

<注意事項>

- ・**購入期限は2023年11月7日18:00（コンビニ・ATMでの支払いは11月6日まで）**です。
- ・領収書は原則発行いたしません。利用明細書・引き落とし明細書・コンビニ発行の領収書・peatix 発行の領収データなどを領収書の代替としてご利用ください。
- ・当日大会会場での受付はできませんのでご注意ください。
- ・12日午後に開催するシンポジウムは無料で公開します。オンラインでの参加方法はホームページもしくはメーリングリストをご確認ください。
- ・その他、参加方法に関する詳細はpeatixの購入ページに記載しておりますので、そちらをご参照ください。

主催：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA21 実行委員会：佐々木てる（会長）、野入直美（開催校理事）、佐藤量（学会事務局）、謝花直美・安岡健一（研究活動委員会）、李洪章（会計）

協力：琉球沖縄歴史学会

後援：沖縄県地域史協議会

- ・大会に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

問合せ先：joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

◎ 自由報告者へのお願い

- 1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分（合計 30 分）で構成されています。
- 2) 報告者へのお願い：報告資料は11月7日までに下記2つのアドレスにお送りいただけると、大会特設サイトにアップロードし、大会参加者のみが閲覧できるようにします。yasuoka.kenichi.hmt@osaka-u.ac.jp、joha.secretariat@ml.rikkyo.ac.jp

事前にお送りいただいた方が会場配布資料を作成するかどうかは任意です。

もし事前送付が間に合わない場合、50部の印刷をお願いします。なお、会場にコピー機はありません。

II. 大会プログラム

◆11月10日（金）

沖縄の戦後史を巡る沖縄市内のフィールドワーク

沖縄が開催地となる JOHO 第 21 回大会は、会期を 3 日間にし、初日はフィールドワークを開催する。戦時に造られた日本陸軍中飛行場は米軍がそのまま接收し、新たに拡大し、極東最大の空軍嘉手納飛行場となった。米軍に土地を接收された人々は居住地を追われ基地を取り囲むように住まざるを得なかった。農村だった越来村は、「基地の街」として知られる旧コザ市（1974年に美里村と合併、現沖縄市）へと変貌する。フィールドワークでは、12日の大会シンポ「沖縄を巡る占領体験をどう書くか／どう聞くか 実践的な身振りに目をとめる」に報告者として登壇する歴史研究者池原えりこさん（「コザ X ミクストピア研究室」主宰）がフィールドワーク前半の案内人を務める。商店街「銀天街」の中に設置され地域の歴史を記録するさまざまな活動に取り組む研究室、米兵相手の店が立ち並び「黒人街」と呼ばれた照屋の町並みを池原さんとともに徒歩で巡る。その後、戦後のコザ市全体の歴史を展示・解説する沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」を訪ね見学、学芸員から解説をうける。

▽日時：2023年11月10日（金）13時15分～17時半（那覇市泉崎の沖縄県庁前「県民広場」発着）。

▽訪問場所：沖縄コザ銀天街内「コザ X ミクストピア研究室」と照屋周辺、沖縄市戦後文化資料展示館「ヒストリート」

▽料金：3400円、（定員に達したため、締め切りました）

大会1日目 2023/11/11			
会場	大会場 201号室	会場①202号室	会場②104号室
9:15-9:30	開会あいさつ(会長)・日程説明(研活)→各会場移動		
9:30-10:00	八鍬加容子	木谷 彰宏	木村豊・那波泰輔
10:00-10:30	朱子奇	古梶隆人	藤原哲也
10:30-11:00	丸川拓己	吉成哲平・三好恵真子	舩谷 鋭
11:00-11:30	ウォーターズめぐみ	石川勇人	吉田祐子
11:30-12:00	中尾知代	永尾陽	小黒純・西村秀樹
12:00-13:00	昼休み(理事会)		
13:00-13:30			
13:30-14:00	田野倉和子	新川郁実	長村裕佳子
14:00-14:30	三田牧	須田佳実	中澤英利子
14:30-15:00	会長企画 ワークショップ		
15:00-15:30			
15:30-16:00			
16:00-16:30			
16:30-17:00			
17:00-17:30	総会		
17:30-18:00			
18:00-	懇親会場で茶話会		
大会2日目 2023/11/12			
会場	大会場 201号室	会場①202号室	会場②104号室
9:30-10:00	八木良広	空き	吉村さやか
10:00-10:30	テーマセッション: 山本恵里子	小林多寿子	峯桃香
10:30-11:00		大島岳	王石諾・三好恵真子
11:00-11:30		庄子諒	冷昕媛・三好恵真子
11:30-12:00	矢吹康夫	中原逸郎	高橋侑里
12:00-13:00	昼休み		
13:00-13:30			
13:30-14:00	大会シンポジウム		
14:00-14:30			
14:30-15:00			
15:00-15:30			
15:30-16:00			
16:00-16:30			
16:30-17:00	閉会挨拶(会長・開催校理事・次期会長あいさつ)		
※網かけはオンライン報告			

◆11月11日（土）

9:15 大会場集合 開会あいさつ（会長 佐々木てる）

開催形式説明（研活 安岡健一）

9:25 各会場へ移動

9:30～14:30 自由報告部会 一日目

201 号室（大会場）

司会：石川良子（立教大学）・根本雅也（一橋大学）

八鍬加容子（オンライン）「ホームレスと交流した人々の語りの変容に見られる、新たな社会構想」

朱子奇（オンライン）「創造的集団としての番組制作会社：オーラルヒストリーから見る作り手の考え」

丸川拓己（オンライン）「高校教育を取り巻く論理を問いなおす：困難を支える高校づくりをめぐる経験の語りから」

ウォーターズめぐみ（オンライン）「声の力：イギリスの近代法制度等に見られる平等と多様性尊重の歴史的背景と展開」

中尾知代「戦争トラウマ記憶の世代間継承と世代間影響：第二次大戦連合軍捕虜とその家族」

田野倉和子「「普通」の学校生活を求めた不登校経験者のライフヒストリー」

三田牧「ジョセフさんの語りはいかに解釈し得るか：パラオの「親日」言説をめぐって」

202 号室

司会：北村毅（大阪大学）・大門正克（早稲田大学）

木谷彰宏「「基地の街」コザはいかにつくられたのか」

古梶隆人「沖縄の若い世代による平和教育実践についての語り：「がちゆん」を事例として」

吉成哲平・三好恵真子「復帰前後の沖縄の現実への内省から埋めようとした「距離」：写真家 東松照明がひとびとの人生から受け止めていった重層的歴史」

石川勇人「沖縄戦の「記録者」が直面した体験者の沈黙：記録者の記録活動に着目して」

永尾陽「米軍に土地接収された地域における歴史継承」

新川郁実「ウチナンチュコミュニティの形成と変遷：変容するネットワークの形」

須田佳実「『沖縄県史 9 巻沖縄戦記録 1』（琉球政府、1971 年）の地域座談会にみる聞き書きにおける「聞く」ことの多義性」

104 号室

司会：山田富秋（松山大学）・和田悠（立教大学）

木村豊・那波泰輔（共同報告）「空襲の記憶を継承する立場：非体験世代内における世代間の差異に着目して」

藤原哲也「戦傷者の妻が語る戦傷病者の諸相」

舩谷鋭「文学研究とオーラルヒストリー」

吉田祐子「オルタナティブ・オーラル・ヒストリー：文化的沈黙と証言行為論」

小黒純・西村秀樹（共同報告）「「映像」シリーズ草創期の研究：社会派テレビ・ドキュメンタリー番組枠はいかに始まったか」

長村裕佳子「デカセギを経験する日系ブラジル人の文化とアイデンティティ：「日本人」の立場で聞き取るということ」

中澤英利子「ブラジルに渡った「花嫁移民」の語りをもとに：女性移民としての移動と生活の経験」

(途中、12:00~13:30 昼休憩 理事会)

14:30~17:00 会長企画ワークショップ「地域とメディア：語りを伝え、残すこと」

17:00~17:15 休憩

17:15~ 総会

総会后、有志による茶話会

◆11月12日(日)

9:30~12:00 自由報告部会 二日目

201号室(大会場)

司会：米倉律(日本大学)

八木良広(オンライン)「「市民」演劇への関わりと日常生活の変化：『河』の公演に携わった人たち」

山本恵里子(テーマセッション)「国際オーラルヒストリー学会(IOHA)の最新動向と展望：2023年7月開催の第22回リオデジャネイロ大会から」

矢吹康夫「どのようにして非当事者は運動に巻き込まれていったのか：マイフェイス・マイスタイルの『ヒロコヴィッチの穴』を事例に」

202号室

司会：蘭信三(大和大学)

小林多寿子「災禍とオーラルヒストリー(1)：南相馬市小高区におけるオーラルコミュニティ形成と地域の歴史の再構築」

大島岳「災禍とオーラルヒストリー(2)：新しい生き方に向けた小高の社会構想をめぐる声の力」

庄子諒「災禍とオーラルヒストリー(3)：福島県南相馬市小高区における避難指示区域への帰還者の語りからみるレジリエンス」

中原逸郎「戦後の花街(かがい)の生活：上七軒の茶屋関係者の聞き取りを中心に」

104号室

司会：佐野直子(愛知県立大学)

吉村さやか「なぜ彼はヘアドネーション活動をやめたいと思うのか：ある美容師の語りから」

峯桃香「戦後の女性が女性の戦争責任を考えるとということ：在野の女性史研究『銃後史ノート』の運動史/メディア史研究」

王石諾・三好恵真子「中国社会転換期における「東北離れ」をめぐる女性たちの葛藤：結婚移民として中国東北から日本の東北へと移動した経験から捉える」

冷昕媛・三好恵真子「人間と自然が共存するアジア的理性の創出：中国初代NGOリーダー万氏のライフヒストリーから読み解く」

高橋侑里「日常空間のポリティクスからみるアジア系アメリカ人社会：統合と分裂の狭間で共に暮らすことについて」

12:00～13:30 昼休憩

13:30～16:30 大会シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか—実践的な身振りに目をとめる」

16:30～17:00 閉会 会長挨拶、開催校挨拶、次回開催校挨拶

Ⅲ. 自由報告要旨

【第1日目】9:30～14:30 (12:00～13:30 昼休憩)

201 号室

・「ホームレスと交流した人々の語りの変容に見られる、新たな社会構想」

八鍬加容子 (九州産業大学)

ホームレスをめぐるのは、ネガティブな価値を内包した言説が広く流布している。それは世界的な格差是正運動である「オキュパイ・ウォール・ストリート」内でも見られた現象であり、ホームレスの人々を運動に「貢献する」かどうかで選別し排除したとされている。そのようにネガティブな言説が広く流布する中で、対抗的な言説はいかにして生まれうるのだろうか。ホームレス支援の場をフィールドに、ホームレスの人々と出会い、交流した人々への聞き取り調査と参与観察を通して考察した。結果、交流の深度に応じて人々の語るホームレス観は変容しており、その語りには新たな社会構想の芽となるようなものも見られた。

・「創造的集団としての番組制作会社：オーラルヒストリーから見る作り手の考え」

朱子奇 (東京大学大学院 院生)

1970年、日本初の独立系テレビ番組制作会社・テレビマンユニオンが元TBSの社員らによって創立された。テレビ局から見ればそれは経営合理化の結果の1つだったが、創立者から見れば、それは作り手である自分たちの番組制作の自由を守るための行動だった。現在、制作会社はよく下請け会社と言われ、制作活動自体よりもその厳しい経営や労働状況に関する議論の方が数多く見られる。しかし、実際の制作活動を見れば、制作会社は必ずしもテレビ局の指示通りで番組制作を行っているわけではないことがわかる。では、制作会社の作り手たちはどのような考えのもとで制作活動を行っているのか、彼らは自らの活動の意義についてどう考えているのか。本研究は番組制作会社の創立メンバーへのインタビューを通じて、こうした疑問を解明するとともに、制作会社がテレビ産業と文化における位置付けについて議論する。

・「高校教育を取り巻く論理を問いなおす：困難を支える高校づくりをめぐる経験の語りから」

丸川拓己 (早稲田大学大学院 教育学研究科 教育基礎学専攻 博士後期課程)

本報告では、高校に生きる生徒の困難を支える高校づくりを経験した人々の語りを検討することを通して、高校教育を取り巻く論理を問い直すことをめざす。日本の高校教育は現在に至るまで「適格者主義」や序列化の論理のもと、数値化できる「能力」で階層的に構造化されてきた。特にその中で下位

に位置づけられる学校では、中退や不本意入学を始めとする様々な困難が生じてきたが、一方で困難を抱えた生徒と向き合う中で、矛盾を組み替えながら実践を行ってきた学校づくりの営みが存在した。本論では特に1990年代中頃の高校改革期に生まれたそうした実践の一つに着目し、そこでの経験と変容の語りから、高校教育の論理を問い直す視点を見出していく。

・「声の力：イギリスの近代法制度等に見られる平等と多様性尊重の歴史的背景と展開」

ウォーターズめぐみ（翻訳家、文筆家、データリサーチャーなど）

時代や出来事の様々な経験・認識が語られる時、差異やその背景にも焦点が当たる。当発表は主に近現代イギリスの「平等」をめぐる法・制度から、労働・教育・政治・植民地等の変化を通じ、「支配的な言説」とその暗黙の諸前提を逆照射し再検討に至らせている、様々な立場や条件のもと営まれた生とその声がどのように現れたかに注目する。また、声を通じた「lived experience」・生活世界と理念的な社会とのずれや統合の過程にも着目し、声が辿る経路や受け止められ方、集団や集合的な感情・意識との関わりなどを事例から見ていき、声と周辺の関係についても考察したい。

・「戦争トラウマ記憶の世代間継承と世代間影響：第二次大戦連合軍捕虜とその家族」

中尾知代（岡山大学大学院社会文化科学研究科）

第二次世界大戦中、日本軍は多数の捕虜を手にした。また、西欧列強の（元）植民地では多くの民間人を抑留した。本報告では、日本軍に囚われた捕虜・抑留者たちの戦中経験が戦後彼ら自身にトラウマを与え、家族に影響したか（transgenerational）、また逆に、家族が元捕虜らに影響したか（intergenerational）について、報告者のオーラル・ヒストリーに基づいて分析する。さらに、彼らが戦後、日本に対する抗議活動を続ける事の意味合い、あるいは和解を目的とした日本訪問旅行によって、対日感情がどのように変化していくのかについて、旅や、捕虜の家族会や家族が開く会議などに参与観察をした成果について報告する。日本兵・朝鮮人軍属側の感情についても余裕があれば言及したい。

——昼休憩——

・「「普通」の学校生活を求めた不登校経験者のライフヒストリー」

田野倉和子（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

本報告の目的は、義務教育段階の一時期に不登校を経験したのちに不登校特例校へ転向した当事者へのインタビュー結果から、彼ら・彼女らの不登校経験の考え方の変化を検討することである。不登校特例校とは不登校児童生徒向けに教育課程を特別に編成した学校である。対象者の不登校の背景や転校に対する思いは様々であるが、共通しているのは「不登校を経験したが学校には行きたい」という本人の強い意志であった。しかし、その背景には「不登校であることに対する抑圧」や「普通」の学校に行きたいという強い思いも根底にあることが語られた。不登校が社会問題化し始めた1980年代と比較すると現在は不登校児童生徒に向けた学校外の学びの場の整備や進路選択肢の幅は拡大している。しかしながら当事者たちの声に注目すると、今なお当事者が直面する「生きづらさ」があることが不登校特例校の卒業生の事例からも示された。

・「ジョセフさんの語りはいかに解釈し得るか：パラオの「親日」言説をめぐって」

三田牧（神戸学院大学 准教授）

本発表では、オーラル・ヒストリーの解釈について問題提起をしたい。発表者は、パラオでオーラル・ヒストリーの収集を行い、日本統治時代に子どもや青年だったパラオの人々の植民地経験について聴いてきた。パラオは、「親日」国家として日本で紹介されることが多い。しかし、発表者は、パラオの人々の人種差別を受けた悔しさや、戦争での苦しみを聞いてきたため、彼らの感情が「親日」で表現されるような単純なものではないと考えている。しかし、このような言説が流布する要因の一つは、パラオの人々が、現に日本統治時代を肯定するような語りをすることにある。そのような語りをいかに解釈することができるか、本発表では考えたい。

202 号室

・「**「基地の街」コザはいかにつくられたのか**」

木谷彰宏（同志社大学 研究開発推進機構及びグローバル地域文化学部）

本報告では、「基地の街」コザがいかにできたのか、その歴史的背景を辿ったうえで、「基地の街」コザに生きた人々が残した様々な語りから、沖縄戦とそれに続く占領を考察する。1954年、沖縄戦中に占有されていた、越來村のゲート通りに面する土地の一角（現在の沖縄市コザゲート通り一帯）が解放された。その土地が解放された地域には、その後、米軍人・軍属向けのお店が軒を連ねるようになり、コザの街は「基地の街」として隆盛していった。本報告では、その当時の「基地の街」コザに生きた人びとが残した語りを通して、沖縄戦とそれに続く占領によって、風景が様変わりした「基地の街」コザを検討する。

・「**沖縄の若い世代による平和教育実践についての語り：「がちゆん」を事例として**」

古梶隆人（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

本報告では、平和教育にかかわる若い世代、特に2014年に設立され2018年11月まで活動をしていた「株式会社がちゆん」の関係者を中心におこなったインタビュー調査から明らかになったことを報告する。現在、「がちゆん」は業務停止状態にあるが、今も大きな影響を与えている存在である。インタビュー調査を通じて、それまで受身的だった平和教育を自発的な平和教育に変えようとしたこと、学校教員や平和ガイドとは異なる道を築いたこと、さらには、彼らが平和教育を通じて社会問題を「ジブンゴト」として考えるように若い世代の意識を変えていこうとしていたことなどを提示することが本報告の目的となる。

・「**復帰前後の沖縄の現実への内省から埋めようとした「距離」：写真家 東松照明がひとびとの人生から受け止めていった重層的歴史**」

吉成哲平（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

戦後日本を見つめた写真家・東松照明(1930-2012)は、復帰前の沖縄を訪れた際の衝撃を契機に晩年まで同地を撮り続けたことが知られる。しかし、既存研究では彼が米軍統治を告発する一方、島の風土に魅了され、次第に占領への問題意識を失ったとする足跡が定型的に論じられてきた。そこで本発表では、発表者らが提起してきた「写真実践」という独自の的方法論により、東松が当時を生きた視点に立ち、彼が撮影を通じいかに沖縄の現実との「距離」を埋めようとしたのかを報告する。特に、分析から

は東松が日本本土の人間としての自らの立ち位置を常に内省し、沖縄に生きる一人ひとりの人生を聞き取ってゆく過程で、国家に翻弄されながらも脈々と続いてきた生活の厚みを感じ取り、表現していたことが明らかとなった。

・「沖縄戦の「記録者」が直面した体験者の沈黙：記録者の記録活動に着目して」

石川勇人（大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程）

本報告の目的は、沖縄戦の「聞き書き」を行ってきた「記録者」への聞き取り調査を通じて、沖縄戦体験者の沈黙の社会的要因を描き出すことである。沖縄戦体験者への聞き取り調査は、1970年代から作家・研究者、あるいはジャーナリストなどの「記録者」によって精力的に行われてきた。その「聞き書き」を担ってきた記録者が遺した著作物や、かれらの記録活動について取り上げた新聞記事や雑誌の記事では、体験者の沈黙に遭遇したという事実が散見される。体験者の沈黙に遭遇した記録者は、かれらの沈黙をどのように理解したのだろうか。本報告では、上記で挙げた資料分析に加え、こうした経験を持つ「記録者」への聞き取り調査を通じて、トラウマ研究の視点から記録者たちの記録活動を考察し、体験者の沈黙の社会的要因を論じる。

・「米軍に土地接收された地域における歴史継承」

永尾陽（明治大学大学院政治経済学研究科博士前期課程）

本発表では、沖縄中部の土地接收された地域における歴史継承の実践について報告する。戦後沖縄には、米軍の土地接收によって戦前の集落に住むことができなくなった地域があり、中部地域はその割合が高い。そこで、アメリカや日本、あるいは製糖会社に対して、元集落の土地返還を求める運動が継続のおこなわれてきた。沖縄では戦前資料の多くを沖縄戦で焼失したが、戦後の聞き取りによって郷土史を多く作成してきた。土地に戻れない住民たちにとって、郷土史の作成は、自分たちの故郷の歴史を探し出す作業であった。運動において郷土史は、自論を裏付ける証拠ともなった。本発表では、戻れない郷土の歴史を継承することについてと、それが運動といかに関係しているかについて報告する。

——昼休憩——

・「ウチナンチュコミュニティの形成と変遷：変容するネットワークの形」

新川郁実（琉球大学大学院地域共創研究科言語表象プログラム専攻）

本研究は、国内外のウチナンチュネットワークの今日の活動に焦点を当て、時代の変化と共に「ウチナンチュネットワーク」がどのように構築されてきたかについて解明し、そうしたネットワークの今後の可能性を展望する。特に海外の沖縄系社会においては、県人会やクラブといった主流の沖縄県人コミュニティがどのように構築されてきたのか、そうした主流のコミュニティのネットワークが若者たちのウチナンチュとしての意識を高める上でどう機能しているのかについて考察する。一方で、沖縄社会においては、「沖縄県から海外へのウチナンチュネットワーク構築」の過程に焦点を当て、コミュニティを設立した当事者側の語りから明確にする。

・『『沖縄県史 9 卷沖縄戦記録 1』（琉球政府、1971 年）の地域座談会にみる聞き書きにおける「聞く」ことの多義性」

須田佳実（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）

本報告では、住民の視点で書かれた証言記録として知られる『沖縄県史 9 巻沖縄戦記録 1』（琉球政府、1971 年）のために開催された地域座談会で、記録者以外に聞き手が存在した事実に着目し、「聞く」という経験の多義性を検討する。地域座談会は、話し手として出席した体験者たちが互いに聞き手となって質問し、補足しあって体験を共有するなど、叙述を前提しない、相手の話を聞くというという場でもあった。報告では、1971 年に糸満市真栄平で開催された地域座談会を対象として、『県史 9 巻』のテキスト分析と、出席者へのインタビュー分析を行う。これを通じて、地域座談会における「聞く」ことには、体験者同士が体験を共有する意義があったことを検討する。聞くこと・書くことを段階的に捉え、歴史叙述の過程を明らかにすることを目指す。

104 号室

・「空襲の記憶を継承する立場：非体験世代内における世代間の差異に着目して」

木村豊（大正大学）

那波泰輔（成蹊大学）

戦後 75 年が過ぎ、戦争を体験した世代の高齢化が進んでおり、戦争体験者が当時の体験を自分の言葉で語ることが難しくなっている。そうしたなかで近年、戦争の記憶を継承する活動が、戦争を体験していない世代のさまざまな年代の人びとによって、さまざまな方法で進められている。本研究プロジェクトでは、空襲の記憶を継承する活動を進めている非体験世代の人びとに対してインタビュー調査を行ってきた。そこで本報告では、そうした調査の記録を取り上げ、非体験世代内における世代間の差異に着目しながら、非体験世代の人びとは自らが体験していない空襲の記憶をどのような立場からどのような方法で継承しようとしているのかについて検討したい。

・「戦傷者の妻が語る戦傷病者の諸相」

藤原哲也（福井大学）

本報告では福井県大野市の戦傷者の妻（1932～）の口述記録から女性が見聞きした戦傷病者の諸相について検討する。夫（1916～2002）は、1938 年中国で腹部を受傷し除隊した。帰郷後、従軍前の職業であった理容師として復職した。1961 年二人は結婚し、理容業を営んだ。女性は大野市傷痍軍人会事務局長を長く務め、福井県傷痍軍人会や地域の戦傷病者たちとの繋がりも深かった。このため、配偶者としての夫から事務局長としての会員まで多岐にわたり戦傷病者を間近で観察してきた。女性の語りから再現される夫との家庭生活、戦傷病者たちの実態および彼女自身の戦傷病者の妻としての意識の変化について考察する。

・「文学研究とオーラルヒストリー」

舛谷鋭（立教大学観光学部）

文学研究とオーラルヒストリーは、作家の語りや作品中の語りを対象となろうが、本報告では、マレーシアの非国語華人（サイノフォン）作家らを対象に 30 年に渡って聞き取りと翻訳、研究を続けるなかで得られた、特に作家へのインタビューと翻訳中のやりとりなどのオーラルヒストリー、すなわち作家の語りを中心に、作品中の語りへの探究も試みたい。

・「オルタナティブ・オーラル・ヒストリー：文化的沈黙と証言行為論」

吉田祐子（神戸大学 大学教育推進機構）

本報告では、1995年に発生した阪神・淡路大震災後に写真作品制作を介して自らの負った心的外傷を表現しようとした写真家小谷泰子の28年間の制作の軌跡を文化的沈黙と証言行為論の観点から論じる。女性写真家である小谷が震災後に心的外傷を言語化し語ることも、自らの身体を対象として写真作品を制作したことの意味をトラウマ理論から論じる。その後、20年間に渡る沈黙を経て写真制作を再開した試みの意義について、証言行為論から考察を行う。総じて、写真家小谷の写真によって作り出される証言行為は、オルタナティブ・オーラル・ヒストリーとしての位置付けが可能であるのか、また、その行為は災害史に対する表象を超えた応答になるのかについて論じる。

・「「映像」シリーズ草創期の研究：社会派テレビ・ドキュメンタリー番組枠はいかに始まったか」

小黒純（同志社大学）

西村秀樹（同志社大学）

毎日放送（本社：大阪）のテレビ・ドキュメンタリー「映像」シリーズは、1980年に始まり、数々の優れた作品を生み出してきた。関西初で、「地域に密着したドキュメンタリー」として、芸術祭賞などの賞を受賞するなど、国内外から高い評価を得ている。その1980年創設当時の報道局長、北野栄三氏に対して、インタビュー調査を行った。北野氏は、1930年大阪・天満の商家に生まれ、陸軍幼年学校に入学した。敗戦後、毎日新聞大阪本社に入社した後、東京本社勤務を経て、毎日放送へ転籍した。どのような経緯で、毎月1回、1時間の放送枠を設けることになったのか。いかなる編集方針を掲げたのか。40年余も続く番組の基軸となるジャーナリズム精神は、いかに培われたのか。これらの問いに対する回答を、北野氏のオーラル・ヒストリーから明らかにする。

——昼休憩——

・「デカセギを経験する日系ブラジル人の文化とアイデンティティ：「日本人」の立場で聞き取るということ」

長村裕佳子（JICA 緒方研究所 研究員）

ブラジルの日系人の日系文化、ニッケイ・アイデンティティについて、これまで様々な研究が蓄積されてきた。一方、1980年代から増加した日本へのデカセギという還流現象は、日系人の文化やアイデンティティの多様化の一つの転換点になっているのではないだろうか。デカセギを経てブラジルへ帰国した日系人はどのような文化を育んでいるのか。また、日本育ちや日本生まれの日系人はどのようなアイデンティティを形成しているのか。本報告は、デカセギ帰国者やその家族への聞き取りをもとに、日系人が滞日経験を経てブラジルへ帰国し、既存の日系文化や集合的アイデンティティにいかに向き合っているのかを分析する。同時に、報告者が「日本人」という立場でかれらに聞き取りを行う中で生み出される語りや眼差し、その対話という共同作業の意義について考察したい。

・「ブラジルに渡った「花嫁移民」の語りをもとに：女性移民としての移動と生活の経験」

中澤英利子（横浜市立大学大学院）

本報告は、「花嫁移民」としてブラジルに渡った女性の語りをもとに、戦後の日本移民のなかでの女性移民の実像を明らかにすることを目的とする。1950年代半ば以降、日本からブラジルに渡った人々に

は独身男性が多かったことから、やがて彼らの結婚問題が浮上してきた。特に、コチア青年という農業移住者のためには、県人会による花嫁探しが始まったり、ブラジルから日本への花嫁募集員の派遣が新聞等で報道されたりしたことで話題を集めた。本報告の調査協力者も、同県人の仲介により、1962年に写真花嫁として鹿児島県からサンパウロのコチア青年に嫁いでいる。調査時 86 歳となった花嫁移民の語りから、その移動と生活を読み解き、ブラジルの花嫁移民の実像を描き出すことで、その再評価を試みる。

【第 2 日目】 9:30~12:00

201 号室（大会場）

・「市民」演劇への関わりと日常生活の変化：『河』の公演に携わった人たち

八木良広（昭和女子大学現代教養学科）

戯曲『河』は、米軍占領下の広島を舞台に、「原爆詩人」峠三吉とその仲間たちが理想社会の実現に向けて疾走した青春群像劇であり、2017 年、2018 年に広島・京都で上演された。この演劇に関わった人たちは、特定の演劇団体または明確な思想信条をもった運動団体の成員ではなく、（報道の中で頻繁に用いられた）“市民”と表現する以外には形容しがたい、人々の集まりであった。凝集性が低く、演劇経験もばらつきのあったこの集団は、しかし、『河』の上演に向けて取り組み、両市において大きな反響を呼んだ。

『河』には、原爆被害者が抱える心の傷や放射線の影響の問題、そして芸術と政治、組織と個人など普遍的かつ現代的な問いが含まれている。この演劇に関わった人たちは、どのように『河』と向き合ったのか。本報告では、「河」の公演に携わった人たちへのインタビューから、その点について考察する。

・テーマセッション「国際オーラルヒストリー学会（IOHA）の最新動向と展望：2023 年 7 月開催の第 22 回リオデジャネイロ大会から」

コーディネーター：山本恵里子（同志社大学）

小黒純（同志社大学）

竹田響（京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学分野）

加藤里織（神奈川大学日本常民文化研究所）

フェルナンダ・モウラ（大阪大学大学院人文学研究科現代日本学）

山本恵里子（同志社大学・元椋山女学園大学）

中尾知代（岡山大学）

コメンテーター：酒井順子（早稲田大学ジェンダー研究所招聘研究員）

世界で唯一ともいえる国際オーラル・ヒストリー団体、International Oral History Association（国際オーラル・ヒストリー学会、以下 IOHA）はまもなく 30 周年を迎える。IOHA はどのような組織なのか、またその国際大会はどのようなものなのか。世界のオーラル・ヒストリーの活動と研究はどこへ向かおうとしているのか。各国がどのような課題に取り組んでいるのか。今年 7 月 25~28 日にリオデジャネイロで開催された大会について、日本から参加者たちからの報告を中心に、今後の IOHA の展望、また JOHA との関わりについて考える。

1) IOHA 小史

IOHA は開始前から 70 年代、80 年代に主としてヨーロッパ圏のオーラルヒストリアンが英国エセックス大学のポール・トムプソンの先導の元、集まりを繰り返していたが、ついに 1996 年 6 月、スウェー

デン・ヨーテボリでの大会で正式に国際オーラル・ヒストリー・アソシエーションとして発足し、今では世界各国からのオーラル・ヒストリー研究者と実践家が交流し、その国際的發展を目指す国際的組織となっている。隔年に国際大会を開催し、学会誌 Words and Silences を発行している。会員間の交流だけでなく、各国のオーラル・ヒストリー関係団体が連携できる場でもある。

日本では「オーラル・ヒストリー」の名称がまだ確立していなかった 80～90 年代に、欧米に留学した日本人研究者たち（僅かな数ではあったが）が IOHA に直接または欧米のオーラル・ヒストリーのリーダーを介して間接的に、IOHA への足がかりを得ていた。そのつながりは、我が国で JOHA 設立準備を始めたころ、大きな支えになっていた。IOHA は世界各国でオーラル・ヒストリーの活動と研究を広げ、繋がっていくという運動であった。2003 年 JOHA 設立大会には旧会長の Janis Wilton 氏が自費で来日し、設立に祝意を送ったほど、IOHA と JOHA は当初から縁が深いといえる。

IOHA は隔年（または 3 年間隔）で大会を開催し、各国のオーラル・ヒストリー研究者、実践者、大学院生の交流の場を提供している。ヨーロッパのほか、中南米、南アフリカ、オーストラリア、インドなどで開かれ、活発な議論が交わされてきた。2020 年にシンガポールで開催予定だった大会は、コロナ禍のため翌年初めてのオンライン開催となった。IOHA は学会誌 Words and Silences（以前は紙媒体であったが現在はオンラインのみ）と、オンラインニューズレターを発行している。

2) ミッション

IOHA はミッションとして、①オーラル・ヒストリーの手法を用いた研究を促進すること、②オーラル・ヒストリーの手法によって収集された歴史的情報の収集と保存に責任を持つ立場の個人や組織のために、その基準と原則の策定を促進すること、③オーラル・ヒストリーの価値を高めること、などを掲げている。

3) ブラジル・リオデジャネイロ大会の概要

2023 年 7 月 25～28 日にリオデジャネイロ大会が対面式で開催された。今回の基調テーマは「デジタル・オーディオビジュアル世界におけるオーラル・ヒストリー」。私たちの社会を取り巻くメディア環境が激変する中で、オーラル・ヒストリー研究もまさに新時代を迎えているという問題意識の下、各国の参加者から多様な現状と課題が報告された。

デジタル・オーディオビジュアルのオーラル・ヒストリーと、ヒューマニティをめぐっては、特にその関係性に関する報告が多かった。ラウンドテーブルでは、AI による書き起こしと手による書き起こしの課題も提示された。日本からは、本テーマセッションの報告者たちが参加、研究発表を行った。本セッションでは、各自が研究発表の内容や、大会の様子、参加しての所感を交えて報告する。

今回の大会で目立ったのは、2 言語を公式とする学会としては、スペイン語の発表や地元ブラジルとアメリカからの参加者が多かったことだ。アジア諸国の動向として、インド、シンガポールは既に重要な存在になっているが、中国の存在が一層大きくなっている。日本とアジア諸国の連帯の重要性も認識された。アフリカからの参加者は、これからの増加を期待されていた。

4) IOHA の課題と展望

今後のデジタル社会への対応として、記録やデータをアーカイブ化するにしても、これまでとは異なる「公開同意書」が必要となってくる。また、インターネット公開の場合、資料が無断で編集される危険性も出てくる。youtube や TikTok に慣れた若い世代に、例えば 2 時間のインタビュー記録をあらためて聴かせ、確認を求めるといった課題もある。また、ビジュアル資料を公開するにあたっての課題も

新たに出てくるだろう。国ごとによって異なる法律や倫理性を議論することは、IOHA では可能である。2025 年はポーランドの古都、クラコフで開催されることが決定した。ウクライナ戦争がそれまでに終わるかは不明だが、過去から現在までの戦争が話題のひとつになりそうである。アジア諸国や日本からも参加者が増えることが期待されている。

・「どのようにして非当事者は運動に巻き込まれていったのか：マイフェイス・マイスタイルの『ヒロコヴィッチの穴』を事例に」

矢吹康夫（中京大学）

病気やケガなどによって「ふつう」とは異なる外見となった人びとが経験する差別をめぐっては、ユニークフェイスとマイフェイス・マイスタイル（MFMS）という 2 つの NPO 法人が問題の告発と解消をめざして活動してきた。先行したユニークフェイスは、誰もが悩む外見のコンプレックスと同列に扱われて、問題が過小評価されるのを警戒し、戦略的に非当事者からの共感を拒絶してきた。それに対して、運動を引き継いだ MFMS は、さまざまな差別問題・社会課題の当事者・支援者との連携を模索してきた。本報告では、MFMS が配信したユーストリーム番組『ヒロコヴィッチの穴』での語りの分析から、どのようにして非当事者が運動に巻き込まれていったのかを検討する。

202 号室

・「災禍とオーラルヒストリー(1)：南相馬市小高区におけるオーラルコミュニティ形成と地域の歴史の再構築」

小林多寿子（一橋大学）

本研究は、語りの実践とコミュニティ形成を事例調査し、オーラル・コミュニケーションが人と人との繋がりや生成する交話機能やオーラルヒストリーの共有による地域の歴史の構築と世代継承性の実際について、大震災・原発事故後に過疎化の進む地域の実態を通して明らかにするものである。とくに着目する南相馬市小高区は、東日本大震災と福島第一原発事故による災禍で住民の離散と約 5 年の地域の空白という困難を強いられた地域であるが、2016 年 7 月の避難指示解除後、帰還した住民たちは地域復興への途上にあつて、さまざまなオーラル・コミュニケーションを重視した地域活動に取り組んでいる。地域社会の再生方途に語りの実践やオーラルコミュニティ形成の実態がみいだされる状況を検討する。

なお、本報告は、2019-2022 年度科研費特設分野「オラリティと社会」による研究成果の共同報告である。

・「災禍とオーラルヒストリー(2)：新しい生き方に向けた小高の社会構想をめぐる声の力」

大島岳（明治大学）

未曾有の災害や感染症の流行など予測不能なできごとを直面した後、人びとはいかに社会を構想しコミュニティを築き得るのだろうか。人びとの自発的な助け合いを特徴とする一時的なコミュニティ形成現象はしばしば指摘されてきたが、中長期的なコミュニティ（再）形成過程の特徴や社会的条件の解明は十分ではない。本報告では、2011 年東日本大震災の避難指示により、一時期住人がゼロになった、福島県南相馬市小高まちなかのコミュニティ創生に関する生活史の声が持つ力に焦点を当て特徴

を分析する。総じて、予測不能さを逆手に取り、起業など新しい生き方とおし社会課題に対応する地域文化の醸成がめざされており、新しい生き方の実験場としての小高がそこにあった。

・「災禍とオーラルヒストリー(3) : 福島県南相馬市小高区における避難指示区域への帰還者の語りからみるレジリエンス」

庄子諒 (東洋学園大学)

本報告では、2011年の東日本大震災・福島原発事故の影響により、2016年まで避難指示区域となった福島県南相馬市小高区・大富行政区への帰還者の経験的語りにもとづいて、なぜ帰還者は、災害による喪失や苦難、長期にわたる避難などを経験しながらも、地域での生活再建を選ぶことができたのかについて、個人にとってのレジリエンスの生成過程という観点から検討することを目的とする。現在、福島の避難指示解除区域では、住民の帰還率の低さが政策的課題となっているが、人びとが帰還へと至る経緯を解明するためには、帰還者の視点からみた災害経験の実態を把握することが欠かせない。このことをとおして、帰還者たちの多様なレジリエンスの発現や、その集合の可能性について考察していく。

・「戦後の花街(かがい)の生活 : 上七軒の茶屋関係者の聞き取りを中心に」

中原逸郎 (楓錦会)

ウクライナでの戦況がこの一年報道されない日はない。この間現地のみならず、遠く離れた日本でも人々の暮らしは大きな影響を受けた。では、第二次世界大戦後の1945年直後の日本の暮らしはいかなるものだったのだろうか。発表者の調査する花街(かがい)は、日本舞踊等の芸と地元の花街言葉で顧客をもてなす芸妓町で、江戸中期以降三味線音楽の進展とともに発達した。しかし、昭和30年代(1955~)全国に500あった花街は都市をめぐる社会・経済環境の変化から現在20に減じている。戦後(1945~1964)は社会的・経済的にも大きな変化の時期であった、本発表では、戦後の京都花街の生活を近畿地方における都市生活の変化の一端として把握することを目標とした。

104号室

・「なぜ彼はヘアドネーション活動をやめたいと思うのか : ある美容師の語りから」

吉村さやか (日本大学文理学部 社会学科 助手)

近年、ヘアドネーション活動が注目を集めている。この活動を国内で最初に始め、広めたのが、NPO法人「Japan Hair Donation & Charity」である。アメリカでヘアドネーションの存在を知った同団体の代表を務める美容師の渡辺喜一氏が、2009年に始めた。以来10年以上にわたり、ドネーションされた頭髪で作った「メディカル・ウィッグ」(JIS規格)を、病気やけがによって髪をもたない18歳以下の子どもたちに無償で提供している。彼の活動はメディアからも注目され、数々の報道歴や受賞歴をもつ。それでも彼はインタビューで、「この活動を早くやめたい」と語った。それはなぜか。本報告では、彼のライフストーリーの検討を通して、この問いを明らかにしたい。

・「戦後の女性が女性の戦争責任を考えるとということ : 在野の女性史研究『銃後史ノート』の運動史/メディア史研究」

峯桃香（立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程）

第二波フェミニズムは歴史における女性を被害者から加害者に転換し、1970-80年代にかけて女性の戦争責任を議論する潮流を作り上げた。1977年から1995年に刊行された『銃後史ノート』はその潮流の代表と位置付けられる雑誌である。実際に当誌の元会員であり、後に女性史研究のパイオニアと称された加納実紀代氏の資料からも女性解放の問題意識は確認できる。しかし初期の誌面では女性問題や男性の戦争責任の言及はほとんどなく、性別役割規範も否定しない。これらはどのような意味を持つのか。本研究では他の会員の聞き取りを加えるによって、加納氏が論者として書き残した資料だけでは見えてこなかった『銃後史ノート』の運動史/メディア史を明らかにする。

・「中国社会転換期における「東北離れ」をめぐる女性たちの葛藤：結婚移民として中国東北から日本の東北へと移動した経験から捉える」

王石諾（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

1980年代後半から、日本社会で「男性結婚難」という深刻な問題が発生し、それに関連してアジアから日本に結婚移住した女性の問題が注目されている。報告者はこれまで女性の出身地と地域性を考慮し、日本と関係性の深い中国東北地域に生まれ、結婚により福島県に移住した女性に焦点を当てて検討してきた。本報告では、さらに1980年代から90年代にかけての中国東北地域に注目する。改革開放政策により民間から海外との交流や移動が活発になる一方で、東北地域では計画経済が強く根付き、社会の市場化への転換が遅れをとった。特に90年代には、伝統的な「単位制度」が弱体化し、人々のライフスタイルが急激に変化する中で、深刻な失業問題が発生し、経済的な機会を求めて他の地域や国へ移住する「東北離れ」現象が顕著になった。本報告では、この時期に国際結婚を選択した女性たちのライフストーリーから彼女らが抱える課題と対処を考察し、さらにはその時代における移動の意味を捉え直していきたい。

・「人間と自然が共存するアジア的理性の創出：中国初代NGOリーダー万氏のライフヒストリーから読み解く」

冷昕媛（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

三好恵真子（大阪大学大学院人間科学研究科・教授）

従来、東アジアの環境問題は国家主導の開発主義の帰結とみなされてきたが、日本の公害経験がありながらも、同様の問題が各地で繰り返されている。中国では改革開放の経済成長に伴う環境問題を解決するため、90年代から環境NGOが実践者として登場し、持続的な自然を取り戻す取り組みに参加することで、自らが価値体系の改変を積極的に促している。従って、科学や制度のみならず、環境問題を作り出す西洋近代化の思考様式そのものを再考し、自然との共生を強調するアジア的理性に目を向ける必要があると考えた。本報告では、ライフヒストリーのアプローチから、社会転換期を生きる初代NGOである万氏の生涯にわたる経験を描き出すことにより、人間中心主義の西洋近代化思潮を内省しつつ、人間と自然が共存するアジア的理性の創出の一助として考察を深めていきたい。

・「日常空間のポリティクスからみるアジア系アメリカ人社会：統合と分裂の狭間で共に暮らすことに

ついて」

高橋侑里（同志社大学研究開発推進機構）

本報告は、アメリカ合衆国、サンフランシスコ、様々な史的背景の人々が集まるアジア系アメリカ人社会を調査対象とする。移住、戦争経験、エスニシティに焦点を当て、人々の日常を構成する小さな政治に着目する。とりわけ、第二次世界大戦に関わって、強制収容所に収監された日系アメリカ人は、彼ら/彼女ら自身に背負わされた日本という出自ゆえに、戦後も絶えず、他のエスニック・コミュニティとの関係において、その戦争責任が想起され、問われ続けてきた。日系人や他のアジア系住民、彼ら/彼女らの語りから、多文化主義に関わる議論、ポリティクスといった大きな政治に回収しきれないアジア系移民社会の分断や統合を考察する。

IV. 会長企画ワークショップ「地域とメディア：語りを伝え、残すこと」

日本オーラル・ヒストリー学会では創設時より、実践的に聞き取りを行っている方々に、より積極的にかかわっていただくという理念がある。実践的にかかわるという意味は多岐にわたるものの、より具体的に言えば、地元地域の語りを積極的に聞き取り、それをなんらかの形で地域住民に伝え、そして残すというを行っている人々といえるだろう。例えば、今回の学会大会開催地である沖縄では、「戦争の記憶」を後世に残していくため地元で活動している方々がいる。そういった活動にもっと焦点をあてて、どのような活動、そして方法で「語りを伝え、残しているのか」を皆で共有することは重要だと思われる。

そこで、本ワークショップでは、地元地域で多くの人々の語りを聞き、そしてそれをまとめ、伝えている方々をお迎えして、情報交換やその方法に関する意見交換を行うことを目的とする。日本全国には地元ローカルな新聞やテレビ（ニュース）の時間帯があり、地域の人々にとって非常に大きな役割を果たしている。大学業界においても、地元メディアの方々と連携し情報発信を行うことがこれまで以上に必要となっている。その意味でも、地元のメディアの方々が「何に注目し」「誰にむけて」「どのような取材をおこない」そして「どのように伝えているのか」を知り、考えることはオーラル・ヒストリー研究においても非常に重要なことだといえるだろう。今回は「地域のテレビ・メディア」に注目し、テレビ・メディアでアナウンサー経験を持つお二人の方をお呼びして、意見交換会を行うことにする。

コーディネーター：佐々木てる（青森公立大学）

司会：米倉 律（日本大学）

登壇者：山野本 竜規（ナカトリモチ／元琉球放送アナウンサー）

今泉 清保（青森テレビアナウンサー／青森公立大学非常勤講師）

V. 大会シンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか／どう聞くか——実践的な身振りに目をとめる」

沖縄では地域史、研究、メディアなどの領域でオーラル・ヒストリーの厚い記述が残されてきた。しかし、それは1960年代に始まり現在も継承する沖縄戦の記録について限定されることであり、沖縄戦の「後」、戦後史については課題がある。戦後史においてこれまで記述の中心をなした「復帰」運動などや米軍に抗った社会運動も体験者が次々と物故するなかで、オーラル・ヒストリーとして記録するのは困難になっている。本シンポでは、2023年3月の研活交流集会「沖縄戦をいかに書くか」から問題

意識を継続させ、沖縄戦記録のオーラル・ヒストリーの成果を踏まえながら、その「後」の時代をいかに書くかを考える。聞き取り、文学作品や写真を通じた時代との接続、空間と時間が複雑に交差する場の記憶の記録、聞き取られない人々の声をいかに聞くかなど一多様な実践報告を受けて、戦後史の記録の在り方、意義などを討議する。

司会：大門正克（早稲田大学）

登壇者：小屋敷琢己（琉球大学）

池原えりこ（「コザ X ミクストピア研究室」）

謝花直美（同志社大学＜奄美 - 沖縄 - 琉球＞研究センター、ジャーナリスト）

コメンテーター：若林千代（沖縄大学）

II. 理事会報告

1. 第10期 臨時理事会 議事録

【日時】2023年3月20日（月）9:00～11:30（Zoom）

【出席者】蘭信三・大門正克・酒井朋子・佐々木てる・佐藤量・佐野直子・謝花直美・梶本歩美・野入直美・米倉律・李洪章・和田悠（敬称略）

【議事録】野入直美

審議事項

1. 奨励賞の審査について

佐々木会長より以下の提案がなされた。審査員は4名とし、うち2名は次年度も継続して引継ぎをする。今年度の審査員は3名から内諾を得ており、1名は回答待ちである。審査員には5役は入らない。スケジュールは、2023年度は4-5月応募、6-10月審査、11月大会で表彰する。2024年度以降は11-1月応募、2-7月審査、9月大会で表彰する。審査員は、1回は対面による会議を行う。

審査員を奇数にするかを議論し、投票によって4名に決定した。会長は審査員の選考に5役として入り、審査委員会には入らないことになった。審査委員と候補者の利害関係が出てきた場合などの選考過程についての議論は、次回理事会での継続審議となった。審査員の手元に審査対象の著作がない場合は立替購入し、学会の予算で代金を出すことになった。副賞については次回理事会で継続審議する。奨励賞は論文の部、著作の部それぞれ2名までであることが確認された。

2. 倫理規定の制定について

学会員から会長に、本学会に倫理規定を設けてほしいという要望が寄せられた。理事会で審議し、倫理規定を設ける方向で情報を収集することになった。

報告事項

1. 学会員同士の登壇・報告依頼について

学会としては関与しないが、学会員からの要望を受けて、事前に謝金についての情報提供を十分に行うことが望ましいという注意喚起がなされた。

2. 理事選挙

佐藤事務局長と安岡・李理事が選挙管理委員を担当し、以下の日程で準備を進めている。4月3日：会費の納入者名簿の作成、4月8日：選挙人名簿のデータ作成、4月中旬：封入・発送（アルバイト約2万円）、5月31日：返送期限、6月：開封作業→当選理事招集。

3. 6月または7月の研究活動委員会企画：ワークショップ「戦争体験の『語り』を教育の現場に（仮）」：和田・清水先生が企画して準備中。ハイブリッド開催の予定。

4. 次回大会の準備状況：教室予約は大教室1・小教室6。フィールドワークはジャンボタクシー1～2台、ひとり3500円程度。会場の本予約ができた段階で理事会MLにより確認し、学会員に日時と場所の告知を行う。ニューズレターはプログラムの確定後に発行する。参加費は前回大会では会員（学生含）千円、非会員2千円（学生は千円）、シンポジウムは無料だったが、今大会では微調整の予定。地域史協議会を「協力」とし参加を促す。

2. 第10期 JOHA 第6回理事会 議事録

【日時】2023年7月30日（月）9:00～11:30（Zoom）

【出席者】蘭信三・大門正克・佐々木てる・佐藤量・佐野直子・謝花直美・梶本歩美・野入直美・安岡健一・山田富秋・米倉律・李洪章・和田悠（敬称略）

【議事録】大門正克

報告事項と審議事項

1. 奨励賞

佐々木会長より以下の報告と提案がなされた。奨励賞は、単著3本、論文5本の応募があった。副賞について、単著2万円、論文1万円を現金で渡すのはいかがか。審議の結果、提案が了承された。

2. 編集委員会

佐野直子編集長より、今年は7本投稿があり、3本掲載になったこと、明石書店による編集は2年目で順調に進んでいること、バックナンバーの販売促進を次期編集委員会への引継ぎまで行っていること、広告収入が厳しくなっていることについて報告があった。

3. 研究活動委員会

安岡健一研活委員長および研活委員より、大会における研究活動の報告と提案があった。

- ① 安岡研活委員長より、自由論題報告の応募 8月1日締め切りを前に、応募者9名、新規入会者による報告希望者2名、計11名の応募があった旨、報告があった。
- ② 大会1日目のフィールドワークについて、謝花直美理事より、現在18名のジャンボタクシーを予約しており、その予約の取り方などについて審議した。その結果、理事以外の参加者を優先し、自由報告者などに声をかけ、理事は状況に応じて18名に加わるか、あるいはそれをこえて別のタクシーで参加するなどに対応することにした。
- ③ 大会2日目の会長企画について、佐々木会長より報告があった。「地域とメディア」をテーマにしたワークショップを開催し、青森放送および元琉球放送のアナウンサーに報告を依頼し、米倉理事がコメントする旨、報告があった。
- ④ 謝花理事及び野入直美理事より、協力を仰ぐ沖縄県地域史協議会および琉球沖縄歴史学会は共催とし、また会場使用料をおさえるためにも、地元の学生の参加は無料にする提案があり、審議の結果、了承された。
- ⑤ 以上をふまえ、審議の結果、大会参加費は、会員・学生1000円、非会員2000円としてpeatixで購入してもらい、地元の学生からは参加費をとらないこと、フィールドワークは、別に参加費を徴収することになった。
- ⑥ そのほか、茶話会や大会の宣伝などについて協議した。

安岡研活委員長より、3月以降に予定していた企画について、ハイブリット対応などのために開催を延期せざるをえなくなり、来期の理事会に継続検討を依頼する提案がなされ、審議の結果、了承された。また、9月あるいは10月に、「作品と現地をつなぐ」ワークショップ「<新大阪> 『ごめん！聞いてごめんな』の現場をたずねて」の提案がなされ、審議の結果、了承され、日程調整を行うことになった。

4. 会計

李洪章会計より、決算と予算について報告と提案があり、了承された。

次期理事会の準備会を対面開催するにあたり、希望者に交通費を支給する提案があり、了承された。

5. その他

①第11期 2023-2025 理事選挙結果について

佐藤量事務局長より選挙結果および次期会長候補に石川良子氏が選ばれた旨、報告があった。

②倫理委員会

佐々木会長より、倫理委員会にかかわって、ワーキングをつくる方向で報告があった。

次回理事会：2023年10月22日

Ⅲ. シンポジウム・ワークショップ報告

3月研究実践交流会：「沖縄戦をいかに書くか」

2023年3月11日、沖縄県那覇市の沖縄県立博物館・美術館（美術館講座室）を会場に研活交流集会「沖縄戦をいかに書くか」をハイブリッド方式で開催した。報告者に市町村地域史からお二人、豊田純志氏（読谷村史）、山城彰子氏（北中城村教育委員会生涯学習課文化振興係）、沖縄戦体験記録運動の歴史研究をする須田佳実氏（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程）が報告、各報告に北村毅氏（大阪大学）がコメントした。会場は25人、オンラインで多数が参加した。会場には各市町村の地域史編集者、沖縄戦や女性史などの研究者、沖縄戦関係の資料館、メディア関係者、平和ガイドなど様々なジャンルの参加者が集い、関心の高さをうかがわせた。

読谷村史編集室の豊田氏は、2000年初頭に発刊された『読谷村史』上下巻を編纂を担当。全住民の戦争被害を明らかにする悉皆調査の実施、沖縄県内でもいち早く村史のデジタルデータを公開してきた。報告「読谷村の事例を中心にして」では、米軍上陸地点となったため村内に臨時住民収容所が設けられいち早く占領が敷かれたこと、また沖縄島北部への避難では女性や子どもの死者が多かったことなどが村史編纂で明らかになったと指摘した。1990年代実施の「戦災実態調査」で沖縄戦当時の読谷村民1万8000人をたどった状況が判明し、村史発刊の基盤となった。読谷村史はその後に編纂された市町村誌の編纂にも影響を与えてきたことが、豊田氏の実践をうかがうことによって再確認された。

山城氏は、現在『北中城村史』編纂に取り組む。それ以前には南城市と中城村の沖縄戦編や証言集編纂をになった。こうした体験から調査方法や担当者の心構えともいえることを説明した。地域史の仕事とは「どこまで地域の仕事に寄り添えるか」が大切であり、地域にこだわり地域の人々のために書く事が大事であるとした。編集担当者は多用な専門領域の人々がおり、地域の人々に応える過程で地域史を支える人々となるという。しかし、山城氏も含め、人材のほとんどが非常勤職員として採用されており、人材が育つのが困難になっていると指摘した。指摘は、地域史発刊計画が終了したために雇用が終了し、地域の人々との間に培われた関係もまた断たれてしまうという沖縄県内各地で起こる問題を明らかにした。

須田氏は「沖縄戦体験記録の音声資料によける「言葉と身体」——『沖縄県史9巻』の行間を読む」と題し報告した。『沖縄県史9巻』の聞き手であった宮城聰、地域の座談会へ着目し報告した。近年始まった沖縄県史編纂時のインタビュー音源が公開され、その中の宮城のインタビューにおける「沖縄口」「標準語」を巡る宮城の言語意識の変化などを説明した。当時の音声資料は、書籍として発刊された『県史』からは消えてしまう記録者の身体を見出し、沖縄戦記録そのものであると同時に聞き手自身の記録であるとした。また、「聞き手の存在を検討俎上に載せることで、記録における身体性という論点を深めることができるのではないか」と指摘した。

北村氏は三氏の報告に対して「沖縄戦を想起するプロセスが歴史ということ」「自治体史は歴史実践の場であることを痛感させられた」などとコメントし議論を深めた。会場からも質問が続き、活発な議論が展開された。

聞き書きによって記録されてきた沖縄戦記録は、戦後78年を経て体験者が次々と物故する中で大きな

曲がり角に来ている。地域史に長年携わってきた方々が課題とするものを共有し、須田氏の報告で示された新たな方法は沖縄戦を書き続けるための新たな示唆となったといえるだろう。これまで沖縄では、沖縄戦記録は、地域史、メディア、平和運動、研究者が手を携えながら進めてきた。これまでを振り返りながら、今後の進むべき道のみを沖縄の人々と会場・オンラインの参加者ともに考える貴重な機会となった。(謝花直美)

IV. お知らせ

1. 会員異動 (2023年1月21日 ~ 2023年10月7日)

新入会員 (入会順)

1. 原田利恵 国立水俣病総合研究センター・主任研究員
2. 菫沢明 (株)不二出版 社外取締役
3. 廣野量子 同志社大学
4. 丸川拓己 早稲田大学大学院教育学研究科教育基礎学専攻 博士後期課程
5. 石川勇人 大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻 博士後期課程
6. リチャーズ和子 大阪大学大学院人文学研究科
7. 中平裕子 社会福祉法人 光明会
8. 深海菊絵 日本学術振興会特別研究員 RPD
9. 新井かおり 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 客員研究員
10. 野村愛美 株式会社ユキリエ
11. 亀井恭祐 広島大学大学院人間社会科学研究科
12. 吉田祐子 神戸大学大学教育推進機構グローバル教育センター 特命助教
13. 所澤潤 立正大学心理学部 教授
14. 庄子諒 東洋学園大学人間科学部 専任講師
15. 峯桃香 立命館大学大学院社会学研究科 博士後期課程
16. 岡田祥子 大阪大学大学院人文学研究科日本学専攻
17. 永尾陽 明治大学大学院政治経済学研究科 博士前期課程
18. 長村裕佳子 JICA 緒方研究所・研究員
19. 冷昕媛 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程
20. 吉成哲平 大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程
21. 岩間優希 中部大学国際関係学部 准教授
22. 増田都希 一橋大学 特任講師
23. 古梶隆人 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程
24. 田野倉和子 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程
25. 高橋侑里 同志社大学 特別任用助手
26. 木谷彰宏 同志社大学研究開発推進機構及びグローバル地域文化学部
27. 三好恵真子 大阪大学大学院人間科学研究科・教授
28. 横川剛毅 和泉短期大学児童福祉学科 教員

- | | |
|----------|----------------------------|
| 29. 桐山節子 | 同志社大学人文科学研究所 嘱託研究員 |
| 30. 高田雅士 | 駒澤大学総合教育研究部日本文化部門 専任講師 |
| 31. 水谷明子 | 津田塾大学国際関係研究所 |
| 32. 長田律子 | 立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫性博士課程在学 |
| 33. 内野海平 | 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程 |
| 34. 山田浩之 | 広島大学大学院人間社会科学研究科・教授 |
| 35. 村上和弘 | 愛媛大学国際連携推進機構 教授 |
| 36. 大森優美 | クイーンズ大学ベルファスト博士課程 |

退会者

西成彦、渡邊文春、横家純一、高江洲昌哉、西尾留美子

※連絡先(住所・電話番号・E-mail アドレス)を変更された場合は事務局までご連絡ください。
(事務局長 佐藤量)

2. 2023年度(2023年4月1日～2024年3月31日)会費納入のお願い

平素は学会運営へのご協力、まことにありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願いいたします。また、一部ですが、2022年度・2021年度分についても未納の会員がいらっしゃいます。こちらも早めの入金をよろしくお願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。(どの会員からの振り込みなのかを確認できないケースが相次いでいます。ご注意ください。)

■年会費

一般会員：6000円 学生・その他会員：3000円

*2023年度より一般会員の会費を5000円から6000円に値上げしました。振込の際にはご注意ください。

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以下の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に振込票等にその旨明記してください。(住所・所属の変更、退会の申し出などの連絡は、振込票ではなく事務局にメールでお願いいたします。)

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票(ゆうちょ銀行の青色の振込用紙)の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来と記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店名：〇一九（ゼロイチキュウ）

店番：019

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便振込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて個別に領収書も発行させていただきますので、その際にご連絡ください。

その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の李（leehj(at)css.kobegakuin.ac.jp）までお問い合わせください。

（会計 李洪章）

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第42号

2023年10月7日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 佐藤量 宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
